

今年は、井伊直弼と開国がテーマです



▲井伊直弼画像（清涼寺蔵）

今年のキーワードは「150周年」です

今年、「日米修好通商条約」が締結されて、150周年を迎えます。そこで、彦根市では、国宝・彦根城築城400年祭で培った、市民との連携という財産を活かして、活力ある彦根を創りあげていくために「(仮称)日米修好通商条約締結150周年記念事業」を行います。

日米修好通商条約締結 150周年記念事業 引き継いだ財産をさらなる飛躍へとつなげるために

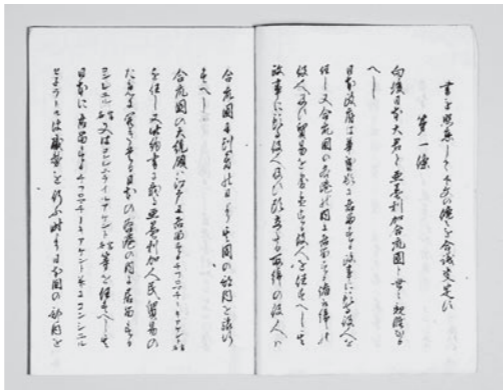
この事業は、江戸時代の鎖国政策を撤回し、日本を開国に導いた、井伊直弼を顕彰するとともに、その大きな要因となった、日米修好通商条約締結の150周年に焦点を当て、関係する都市や、関係機関との連携を図りながら開催するものです。そこで、日米修好通商条約締結に関わった井伊直弼と、日米修好通商条約について、お知らせします。

当時の日本は、アメリカと日米和親条約を締結し、開国派と攘夷派が国内を二分する時代にありました。直弼は、このような時期に大老に就任しました。そして、將軍の後継者問題などもからむ政治対立のなか、アメリカとの貿易を認める日米修好通商条約の締結を決断し、実行しました。この条約の締結が、日本の近代化のきっかけになりました。問い合わせ先 企画課 ☎30-6141番、FAX 22-13988番

日米修好通商条約

安政5年6月19日(1858年7月29日)に、江戸幕府がアメリカ合衆国と結び、貿易の自由を認めた最初の条約。条約の主要な点は、アメリカ公使の江戸駐在、すでに開港済みの下田・箱館(現在の函館)に加え、神奈川・長崎・新潟・兵庫の開港、外国人居留地の設定および同地における自由貿易、江戸・大坂(現在の大阪)の開市などを定めた。

▶日米修好通商条約写(重要文化財 彦根藩主井伊家文書の図彦根城博物館蔵)



私たちも参加しました ~国宝・彦根城築城400年祭を盛り上げた人たち~

ベロタクシーを通して NPO法人五環生活 齋藤 毅 (中央町)

私は、NPO法人五環生活のなかで、ベロタクシーの運行に関わっています。この事業には、国宝・彦根城築城400年祭をきっかけにベロタクシーを走らせることを知り、参加しました。



運行を始めた当初は、手探り状態でのスタートでしたが、運行の開始が桜の季節と重なったことから、多くのお客さんに利用してもらったことが、順調にスタートしました。ドライバーをして良かったことは、天守までは登れない人などを案内し、利用者には喜ばれたことです。今回の祭りを通して感じたことは、彦根を盛り上げていくという人が、たくさんいたこと。ベロタクシーを運転していて、お客さんに「彦根には、面白い人がいるね」と言われたことは、天守までは登れない人などを案内し、利用者には喜ばれたことです。



▲まちなかを走るベロタクシー

れることがあり、彦根には面白い人がいると思っていたことが、私だけの思いではないことを確信しました。今後は、観光客中心から、もっと地元のお店街など地域に根ざした範囲で、買い物客などに目を向けて、利用者を増やしていきたいと思っています。

再発見した彦根の魅力

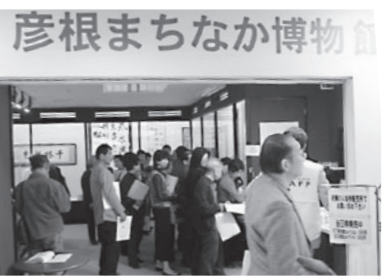
まちなか博物館カリスマ芸員 戸成 晴美 (吉沢町)

カリスマ芸員として、まちなか博物館で展示の案内をしています。日下部鳴鶴と高橋狗佛については、今回の活動を通じて初めて知りましたが、彦根にも興味深い人がいたんだと歴史の深さを再発見しました。まだまだ私が知らない素敵な人がたくさんいるかもしれないと思うと、もっと彦根を知りたくなってきました。



今回、カリスマ芸員として活動して、多くの人との出会いもありました。築城400年祭の期間だけでなく、普段から、たくさんの方が、ボランティア活動をしていることも知りました。ボランティアという少し身構えてしまいがちですが、今回の活動をきっかけに大げさに考えず、気軽に来るものだと実感しました。

の期間だけでなく、普段から、たくさんの方が、ボランティア活動をしていることも知りました。ボランティアという少し身構えてしまいがちですが、今回の活動をきっかけに大げさに考えず、気軽に来るものだと実感しました。ボランティアという少し身構えてしまいがちですが、今回の活動をきっかけに大げさに考えず、気軽に来るものだと実感しました。



▲彦根の宝物を展示したまちなか博物館

元気な彦根をつくっていく

NPO法人小江戸彦根 小野 隆 (仏生寺町)

昨年の2月に会社を定年し、何かできないかと思っていたとき、「彦根を盛り上げ隊」を知り、そこで屋形船を知ったことを機に参加しています。



船に乗って内堀から見る景色は、外から見るのとは違う視点で石垣などを見ることができ、彦根城について、新たな発見がありました。また、乗船中にお客さんと話をするのができたり、スタッフと話したりするなかで、新しい人とのつながりや、ふれあいがあり、貴重な体験をすることができています。

お客さんのなかには、遠方から来てくれた人も多く、改めて彦根の価値を認識しました。今後は、もっとお客さんに来てもらえるような、彦根の新しい価値の創造をしていき、より元気な彦根を作っていきたいと思っています。



▲内堀をゆったりと進む屋形船